

# 創世記の記録

第2部 創造主が造られた世界

## Ⅱ／世界の創造

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

— 1976年版 —

## 第2部 創造主の造られた世界

### II 世界の創造（創世記一章一〜二節）

#### 基礎の基礎

聖書巻頭の一節は聖書の基礎です。もし先にも述べたように、創世記が本当に聖書の基礎なら、全世界と諸民族を取り扱っている一〜二章までが、イスラエル民族の始まりについて具体的に取り扱っている残りの部分（一〜二章以降）の基礎をなしていることがわかります。

同様に、一章は、これら一〜二章の基礎になるのです。なぜなら、一章は世界とその中にあるすべてのものの創造を手短かに述べているからです。結局、一章一節はこの基礎になる章の基本的な節で、宇宙自体の原初の創造について物語っているのです。したがって、この節はすべての基礎の基礎です。こういうわけで、聖書の中で最も大切なことばなのです。一節は疑いもなく、今まで書かれた最初のことばであり、世界で最も多く印刷された聖書の巻頭のことばです。ゆえに、このことばは、他のどのことばよりも多くの人に読まれ

ていると言っても間違いのないでしょう。ほとんどの人は、一度は聖書を開いて読もうとするのです。たとえそれ以上読み進まないにしても、少なくとも聖書のこの巻頭のことばは読んでいます。

もし一章一節を心から信じられるなら、その人は聖書の他のところに書かれているどんなことでも困難なく信じる事ができるとしばしば言われています。神が本当にすべてのものを創造されたのなら、神はすべてのものを支配し、すべてのことを成し得るからです。さらに、この一節は、世界の起源と意義に関する人間の誤った考えすべてを明らかにします。

- 1 無神論の誤りを証明する—神が宇宙を創造されたのだから。
- 2 汎神論の誤りを証明する—神は御自身が造りになった宇宙を超越しておられるから。
- 3 多神論の誤りを証明する—唯一の神がすべてのものを創造されたのだから。
- 4 唯物論の誤りを証明する—物質には始まりがあったから。
- 5 二元論の誤りを証明する—神が創造された時に存在していたのは神のみであったから。
- 6 ヒューマニズム（人間中心主義）の誤りを証明する—神が究極的実在であって、人ではないのだから。
- 7 進化論の誤りを証明する—神がすべてのものを創造されたのだから。

実際、これらすべての誤った考えは、同じ不信仰を表明する異なる方法に過ぎません。どの考えも、人格をそなえ、物質を越えた神は存在せず、究極的実在は永遠の宇宙自体に見いだされるはずで、宇宙が現状に発展したのは、宇宙を構成している構成要素自体に内在していた特性によるといえます。事実上、この考

えのどれでも、他のすべての考えを互いに包括し合っているのです。例えば、二元論は多神論の一つの要約された形です。多神論は汎神論の通俗的表現です。汎神論は唯物論を前提としています。唯物論は進化論によってその役目を果たします。進化論はヒューマニズムにまとめられます。そしてヒューマニズムは最後には無神論に到達します。

これらすべての体系は、神を認めない進化論に立つヒューマニズムの体系と呼んでよいでしょう。他の哲学思想もまた、この同じ巨大な体系に組み込まれます。自然主義、斉一説、理神論、不可知論、一元論、決定論、実用主義などはみなそうです。これらすべては、「初めに、神が天と地とを創造した」という驚くほどわかりやすく、子どもにも理解でき、無限の深い意味を持つ偉大な真理に反対する陣営に属するものです。

古代から現代に至るまで、これだけ多くの造り主の存在に反対する哲学が、数えきれないほど多くの人々の心を動かしてきたにもかかわらず、聖書には、神の存在を証明しようとする試みが全く見いだされないのは驚くべきことです。創世記の巻頭のことばは、この事実を当然のこととしています。あたかも、愚かな人だけが神はいないと言いつける（詩一四・一）のであり、このことは明らかと言わんばかりです。

聖書以外には造り主御自身による創造の明白な啓示はありません。この事実が一般の人には明らかではありませんでしたが、今や、明らかになってきました。というのは、最近の思想を初め、他の古代の宗教書や宗教系統のすべてを調べても、創造者についての記述はなく、ある種の、もともとあった物質またはエネルギーで始まったとしているのです。最初の混沌とした状態（水・火または何であれ）にあって、自然の力（またはそれを人格化した神々や女神たち）が宇宙の変化の引きがねとなり、今日の形態に宇宙を進展させたというのです。

古代の民族の間に、このような汎神論に立つ進化論的宇宙形成論が行きわたっていたにもかかわらず、靈感された創世記の記事は、これらの考えの誤りを指摘しようとしていたり、真の神の存在を証明しようともしていないのです。この不思議な沈黙の理由は、創世記の記事はこれら他の思考体系が出現する以前に書かれたという事実にあります。他の体系は、創世記にある真実の記録を押しつぶして、置き換えるために、後になって作り出されたものでしょう。創世記の記録は、もともと創造の直後（もしかすると神御自身によって）、天地創造の一週間に実際に起こった出来事（天と地の経緯）を単に叙述的に述べて書かれたことでしょう。創造の記事が書かれた時は、神の創造を疑う人はだれもいなかったのですから、神の存在とその創造の理由を述べる必要は全くなかったのです。

## 最初の節

一章一節 はじめに神は天と地とを創造された。（協会訳）

もし、私たちが、聖書に書かれていることや世的な資料を、何でも徹底的に理解しようと思つたなら、まず、この一節の教えを理解することが非常に大切です。そこで、この最も大切な宣言に含まれている語句を一つずつ考えてみましょう。

### 1 「神」創造者

神の名として初めて出て来るのは、ヘブル語のエローヒーム (Elohim) です。エローヒームという神の名は、神の主権と全能を強調したことばです。これが一章で用いられている名です。イム (im) という語尾はヘブル語で複数を示す語尾です。したがって、エローヒームは、実際には「神々」を意味する可能性があります。そして、多くの文章で異教の神々をのように訳しているのです (例えば詩九六・五)。

しかし、創造の神の力ある名として、この節では明らかに単数で用いられています。聖書でこのように用いられている所は二千箇所以上ありますが、これはそのうちの最初です。こうして、エローヒームは単数の意味を持つ複数の名称、すなわち、「単複数」名詞で、これによって神の唯一性と複数性を示しているのです。神は一つですが一つ以上の存在です。

## 2 「創造された」

この「創造された」(Daba バラー) は神の「わざ」にしか用いられない注目すべき単語です。神だけが創造できる方です。すなわち、なにもなかったものを存在へと呼び出されます。神は「無いものを有るもの」のようにお呼びになる方」(ローマ四・一七)で、「……この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを、悟るのである」(ヘブル一・三、協会訳) のです。人は物を「作つ」たり、「組み立て」たりできますが、ものを創造することはできません。神は、また作ることも組み立てることも(ヘブル語では各々器 asah アーサーと yatsar ヤーツアル) できます。しかも、人がするよりもはるかに効率的に、すばやく行えます。創造のわざは、神だけのわざです。作つたり組み立てたりするわざは、すでに存在している物質をもつと複雑な系へとまとめていく行程から成っているのに、創

造のわざは、ある重要なものをみことばをもつて存在させるわざで、神のみこころとみ力以外に物的なものは何も存在していなかったのです。

一章一節に用いられている「創造する」ということばは、この時点で物理的存在である宇宙が神によって存在するようになったことを告げています。神のこの最初の創造の行為の前には何も存在していませんでした。神のみが無限で永遠の存在です。また、神は全能です。ですから神は宇宙を存在するように呼び出すことができるのです。この永遠の超越的な神の概念を十分に把握することは、私たちにとって不可能ですが、これに代わるものとしては、永遠かつ自存の宇宙という考えしかありません。この考えもまた理解できない概念です。永遠の神か永遠の物質か。このいずれか一方を選択するしかありません。もし、現在の科学的因果律(原因があつて結果が来るといふ科学の法則)が確かなら、永遠かつ自存の宇宙という考えはあり得ません。なぜなら、物質の無秩序な粒子は、ひとりでに複雑で、秩序正しい、知的な宇宙になり得ないし、まして、人間に複雑な宇宙を理解する知性を付与するなどということはできません。人格神のみが、このような結果を生ずるための唯一の適切な原因です。

## 3 「天一空間」

この単語はヘブル語のシャーマイム (shamayim) で、エローヒームと同じように単複数名詞です。複数形でありながら、文章の前後関係と用いられている動詞が単数形か複数形かによって、単数の「天」または複数の「天」とも訳することができるのです。しかし、それは天の星々を意味するものではありません。天の星々は創造の第四日に造られたのです(創一・一六)。

## 4 「地」

同様に「地」ということばは、宇宙の物質成分をさしています。最初の創造の時に、宇宙にはほかに惑星も恒星も星間物質もありませんでした。これらのどれも、創造の四日目までは存在していなかったのです。地球も、そもそも初めは形がありませんでした。(創一・二)したがって、この節で本質的に物質の基本的構成要素の創造について語らなければなりません。これら基本的構成要素は、その後で構造を持った地球へと、さらに後で、他の諸物体へと組織されたはずです。この単語はヘブル語のエレッツ (eletz) で、しばしば「大地」とも「陸地」とも訳されています。「天」ということばと多少似ていて、地上のある特定の場所(例えば、一・二章五節の「カナンの地」)、または一般に大地を構成している物質(例えば、一章一節の「地は植物を芽生えさせよ」の「地」)を意味することばです。

## 5 「初めに」

聖書の最初の節は、空間と物質の創造を物語っているだけでなく、時間の始まりにも言及しているのです。宇宙は実に空間・物質・時間の連続体です。これらのうちどれをとっても、他の二つがなければ意味がありません。物質という用語はエネルギーをも含めて理解すべきことばで、空間と時間の中で、機能を果すものです。空間は、そこに存在する実体とそこで起こる出来事を通してだけ、五感を用いて観測でき、測定できるのです。空間は物質と時間を必要とします。同様に、時間という概念は、実在しているものや起こる出来事で時間の経過に関係している場合にのみ意味があります。時間もまた空間と物質を必要とします。

こうして、一章一節を筋道の通ったはつきりしたことばで言い換えると次のようになります。「超越的で全能の神が、空間・物質・時間からなる宇宙を呼び出し、存在させた。」前に言及したように、エローヒームは神が唯一の神であるが、一位格以上の存在であることを示唆しています。神は三位一体であるとはつきり言うてはいませんが、神の創造的活動の産物が、少なくとも三位一体の可能性を強く示唆しています。三位一体、または三つであって一つであるということは、組織上三つ組であるということとは異なっています(三つ組では、その系を構成する明確な別々の構成要素があります)、むしろ、各構成要素はそれ自体全体とのかかわりで共存し、同一限界にある一つの連続体です。すなわち、宇宙は空間、物質、そして時間が別々に存在するのではなく、むしろ、すべての空間、すべての時間、すべての物質が全体として存在するので、三つであって、本当の意味で一体なのです。

「初めに」という句は、ヘブル語の bereshith (ベレーシース) で、欽定訳聖書では実にうまく訳されています。ギリシア語の七十人訳聖書には、en arche (エン・アルケー) と訳され、ヨハネの福音書一章一節(初めに、ことばがあった)で用いられているのと同じことばです。宇宙に始まりがありましたか、「ことば」であるキリストはすでに存在しており、こういうわけで、キリストは宇宙を超越した方です。

現代の翻訳者の幾人かは、一般社会で広く受け入れられているとてつもない宇宙の年齢と調和させる手段を見いだそうとして、ベレーシースをもっと妥協的に、すなわち、「神の創造の初めに」とか、「神が創造を始めた時」のように解釈することを提案しています。ヘブル語学者がこれを文法的に許される解釈であると認めたとしても、文章の前後関係から見て、そのような解釈は許されません。一章一節の目的は、明らかにすべてのものの始まりについて語ることです。しかも、このような解釈は問題に答えているというより

も、むしろ、問題を提起しているのです。さらに、一節と二節の間にある接続詞「そして」(英語は and) は、明らかにそれに続いて起こる行動のあることを示しています。すなわち、一節は二節の修飾句のようなものではなく、次の宣言に先だつ最初の宣言です。

同じ理由で、一節は全体として、この章の後につづく節に記されている出来事の見出しとも、まとめ(要約)とも考えることはできません。実際に、まとめは二章四節にあつて、「これは天と地が創造された時の経緯である」とあります。さらに、創造の六日間の終わりに次のようにまとめとして、「こうして、天と地とすべての万象が完成した」と二章一節に記してあります。この声明は明らかに一日目も含めて六日間の働きに關係があります。しかも、このまとめには「複数の天」(Heavens) も含まれています。複数の天についての陳述は六日間を通して、一章一節にしか見られません。これより、二章一節のまとめには、一章一節のわざも含まれていることがわかります。言い換えれば、初めになされた天と地の原初的創造は、物理的宇宙を構成している空間・物質・時間の連続体の基本的構成要素を、みことばをもつて呼び出し存在させる六日間の最初の日の最初のわざだったのです。

## 創造の日時

一章一節の独特で重大な出来事が起こつた正確な時期に関する大切な問題は、現在の聖書年代学の研究手段で完全には解決できません。多くの学者が聖書の完璧な年代を系統立てて説明しようとして熱心に努力していますが、彼らのまとめたものが互いに合わないのが事実です。この事実こそ、この問題が重大で、まだ

解決されていないことを示しているのです。この年代を系統立てる作業を妨げているもののリストには次のようなものがあります。

- 1 最初に記録された数字が正確に転写されたり伝達されたりしたかどうかが不正確であること。  
なぜなら、マソラ本文、七十人訳聖書、サマリヤ写本はこの点で一致していないからである。
- 2 古代の暦年の長さが、現在の暦年の長さと同じであつたかどうかが不正確であること。
- 3 旧約聖書の系図には、世代が欠けていた可能性がある。
- 4 イスラエルとユダの「士師」や王たちの支配期間の一覧表は混乱していたり、時に矛盾しているように見える。
- 5 エジプトやバビロニアの同時代の年代記は、はるかに不十分であること。
- 6 放射性炭素同位元素(C14)による年代測定法やその他の物理的年代測定法から得られた結果は、さらに不満足であること。

聖書に基づかない資料はどんなものでも非常にあいまいで互いに矛盾しています。この点から見て、何らかの正確な年代を得る方法はただ一つで、それは聖書自体から見いだされなければなりません。聖書の資料は本質的には次のわく組みに集約されます。

- 1 創世記一章は、宇宙の創造から人の創造までの期間を示す。
- 2 創世記五章は、最初の人から大洪水までの年代記的資料を含んでいる。
- 3 創世記二一章は、大洪水からヘブル民族の開祖アブラハムまでの年代をまとめたものである。
- 4 旧約聖書の歴史書(特に創世記、出エジプト記、民数記、ヨシヤア記、士師記、サムエル記第一、第二、

列王記第一、第二、歴代誌第一、第二は、アブラハムの時代から捕囚にいたるイスラエル民族の年代記的資料を含んでいる。

5 イスラエルの捕囚と帰還の年代記は、いくつかの預言書（特にイザヤ書、エレミヤ書、ダニエル書）、また捕囚後の歴史書（エズラ記、ネヘミヤ記）から得られる。

6 中間時代の年代記は、必然的に一般の年代記、特に非常に疑わしいエジプトのマネトーの年代のような一般の年代記か、あるいは、ダニエル書九章に潜在的に含まれている「七十週の預言」によらなければならない。

これら聖書の資料に基づく年代記の体系で最もよく知られているのは、ジェイムス・アッシャー大主教（一五八二～一六五七）の年代です。アッシャーは、創造の時期を紀元前四〇〇四年と算出しました。進化論的斉一説の優勢な今日、一般にアッシャーの年代は馬鹿にされています。しかし、アッシャーは優れた学者で、この問題について現代の批評家より実によく知っていました。アッシャーはダーウィン以前に研究しましたが、科学的に無知な時代ではありません。

この信念は、単純で何でも信じる人、また狂信的な人に限られていたのではない。アイザック・ニュートンほどの思想家もこの信念をそのまま受け入れ、彼の年代の問題に対する詳細な研究をまとめた著作「修正された古代王国の年代」で、紀元前五〇〇〇年より前に君主制度を始めたという古代エジプト人の記録にひどい批評を浴びせた。それも本気で酷評したのである。なぜなら、十七世紀または十八世紀でさえ、知識人にとつて、人類の歴史が六〇〇〇年以上前にさかのぼるといふ考えは、ばかげた根拠のない憶測に過ぎないものだったからである（Colin Renfrew, *Before Civilization* [New York: Alfred A. Knopf Publishers 1974]

二十一ページより引用、レンブリュウはサザンプトン大学の考古学教授）。

現代人にとつて、この聖書の年代記は短かすぎてばかげています。しかし、ユダヤ人以外の他の古代諸民族の持つそれぞれの年表も、せいぜい同じくらいの年表です。

したがって、放射性炭素による年代測定法が発見されるまでは、有史以前のヨーロッパで起こった出来事の年代を決定する信頼できる方法はただ一つであった……。それは偉大な文明の初期の記録による方法であった。これらの記録は、場合によって紀元前三千年までさかのぼることができる。……エジプト王の年代は、紀元前三千年の少し前に当たるエジプトの第一王朝までさかのぼれる。それ以前の記録は、どこにもない（前と同じ二十五ページ）。

このように実際にあるすべての歴史上の記録は、実質的に聖書の短い年表に一致するのです。もちろん現代の進化論教義を支持するのに必要な長い年代は、現在観測されるある種の自然過程の変化の割合をそのまま当てはめるといふ斉一論に基づいていることでしょう。しかし、このような計算はすべて、必然的に多くの証明されていない、そして、事実上テストもできない仮定事項に基づいている可能性が強いことを認めるべきです。これらの仮定事項は、決して実際の歴史記録ほど正確でもないし、信頼できるものでもありません。それらの記録のうち、確かに聖書が最も正確で信頼できるものです。

さらに、これらの斉一論者の仮定事項を用いてさえ、多くの自然の過程は短い聖書の年代とほぼ一致していることを示せるのです。そしてこれらの自然過程のうちほんのわずかのものが、進化論的考えを支持するのに必要な十分に長い年代を与え得るのです。この問題は他の出版物でさらに広範に吟味しています（ヘンリー・M・モリス著 *Scientific Creationism* [San Diego: Creation Life Publishers, 1974]）。

科学上の資料は聖書の記録に一致した最近の創造と歴史年表に軍配をあげていることを示しています。

これらの事実を心に留めると、明確で文字通りの聖書の年代を受け入れない妥当な理由はありません。これは必ずしもアッシヤーの年代ではありませんが、大体同じくらいのものとなるでしょう。なぜなら、アッシヤーは計算の基礎を聖書の資料に置いていたからです。前述のように、このような計算には多くの不確実性があります。創造の時期について、紀元前四〇〇四年というアッシヤーの年代の他に、多くの年代が算出されています。それらの幾つかを挙げると、七十人訳は五二七〇BC、ヨセフスは五五五BC、ケプラーは三九九三BC、メランヒトンは三九六四BC、ルターは三九六一BC、ライトフットは三九六〇BC、ヘイルスは五四〇二BC、プレイフェアは四〇〇八BC、リップマンは三九一六BC、ユダヤ年代記は三七六〇BC、その他となります。

その上、上述の計算はすべて、創世記五章と二一章の系図を完全なものと仮定して算出されたものです。多くの著者は一つまたはもっと多くの長さのわからない間隙が、これらの系図——特に二一章——に見いだされたと論じています。この説は、後に、この章の注解の折りに検討します。ともかく、現代人の起源を紀元前四千年ではなく、紀元前三百万年としている現代の進化論的年代に調和するように、創世記の年表を引き伸ばすことはできません。創世記の記録を見当違いのばかげたものにするこなしに、いくら多く見積ってもこれらの章に総計五千年以上もの記載もれがあるとするのは不可能です。したがって、聖書によれば人の創造の時期が紀元前一万年以上前であったとは支持できないでしょう。

宇宙の創造は、人の創造より五日前のことでした。これらの五日間は文字通りの一日一日で、地質学者によつて仮定された地質時代に対応するあいまいな期間でないことが次章でわかります。六日間の創造の前に、

時間的に何ら意味ある間隙はなかったのです。このことが次項で取り扱われます。

それゆえ、創世記に記録されている地球の歴史に関する記事は宇宙の創造を数十億年前ではなく紀元前数千年とします。正確な期日は、紀元前一万年くらいであるかも知れませんが、もっと短くて紀元前四千年くらいかも知れません。少なくとも、聖書から考えて、この年代の下限に近い方が可能性が大きいと言つてよいでしょう。

## 間隙説

根本主義者（二十世紀初期に米国で起こった新教運動で聖書の記載をそのまま受け入れるとする人）たちに、誤つて広く受け入れられている見解は、一章一節の原始の創造は、何十億年も前に起こった可能性があり、一節と二節との間に膨大な時間の隔たりがあったとして、その間にすべての地質時代を挿入するのです。この立場の解説者は、二節は地質時代を終結させた激変後の地球の状態を記述したものと考えています。地球を暗黒と水で覆ったこの激変は、神に反逆したサタンの罪に対する神のさばきだと説明されています。激変に引き続いて、神は、三節から三一節に述べられている文字通りの六日間で世界を「再創造」されたというのです。

間隙説 (gap theory) として最も良く知られているこの考えは、「破壊と建設説」とも「アダム前激変説」とも呼ばれています。この説は、十九世紀初頭、スコットランドの神学者トーマス・チャマーズがはじめに復活させ、スコフィールドの引照付き聖書の注釈から広く一般化し、アメリカの大部分の聖書学校や根本主

義の神学校でここ百年くらい、教えられているものです。直当時の間隙説の主な目的は、聖書の年表とチャームズの時代に広く受け入れられるようになった地質時代の体系とを調和させようとしたことでした。多くの根本主義者は、進化論的地質時代に関する面倒な問題のすべてを、この「間隙」の中に棚上げするだけで、地質学者が望むだけの時間を与え、これらの面倒な問題を不問に付そうと考えたのです。

不幸にも、この態度によって、進化論体制がアメリカの学校教育、報道機関、その他の大部分の重要な研究機関を支配するのを許してしまつたのです。「間隙論者」で進化論を信じている人は、ほとんどいませんが、間隙説に由来する誤つた安全感に基づいて、単に問題全体を無視できるとする聖書解説者の傾向こそ、進化論が支配する結果をもたらすもとなつたのです。地質時代の体系は、本質的に進化の体系と同じなのです。それぞれの地質時代は、生物進化の最も重要な証拠である化石によって、時代が同定され、年代が決められているのです。進化の体系を受け入れることによって、論理的にばかりか、遅かれ早かれ歴史的にも地質時代の体系を受け入れることになるのは避けられないのです。

こういうわけで、地質年代の体系に調和するように聖書を解釈しようとする学説は、健全な釈義に基づいているかどうかを確かめるためにあらゆる面で極めて批判的に吟味しなければなりません。動機が疑わしいだけでなく、科学的前提にも誤りがあります。間隙説は、地質時代の体系と調和させようとして提案されたものですが、意図に反して調和しません。なぜなら、地質時代の体系は、完全に斉一説の仮定に基づいているからです。斉一説とは自然の過程が現在起こっているのと本質的に同じように、過去においても常に作用してきたという信念です。もちろん、間隙説に必要な全世界に及んだ激変を斉一説はすべて否定します。その結果、地質年代を受け入れている地質学者ならだれも、間隙説や地球全体に大洪水があつたとするどんな

理論をも受け入れられないのです。こういうわけで、間隙説は、科学的には自滅するのです。間隙説は、全世界に及んだ激変を事実として認め地質時代と調和させようとするものです。しかし、全世界に及ぶ大洪水は、地質時代の体系が立脚している斉一説の前提を否定するだけでなく、実際に、地質時代の証拠とされているすべてのものを完全に消し去ってしまうでしょう。

地質年代の体系は、進化論で考えているように化石が次々と地殻の堆積岩の中に保存されているという仮説に基づいているのです。地球を水浸しにし、深淵の表面をやみで覆つたままにするような大激変は、地球全体に及ぶ爆発以外の何物でもなく、それは、何十億トンもの岩屑を空に吹き飛ばして太陽光線を覆い隠し、地球の残りの固体部分をすべて、海面下に沈めてしまうような規模のものだったはずで、このような破壊的な爆発は、堆積物から成る地殻とその中のすべての化石を、跡形もなく消し去ってしまうので、間隙説で調和させようとしている「地質時代」の証拠を何一つ残さなかつたはずで、

間隙説は、科学の面からみてありえないだけでなく、神学的にも実に有害です。地質時代の体系を受け入れることによって、聖書学者は、これらの「時代」を識別する化石記録をも受け入れたのです。しかし、化石は死んだ生物です。化石は、はつきりと、苦痛や病氣や死、しばしば激烈で広範囲に及ぶ死が、全世界にわたつて実際に起こつたことを物語っています。化石は、恐竜や巨大アルマジロなどの今は絶滅した動物とともに、サメやクラゲ、トンボやゴキブリ、カメやワニ、コウモリやビーバーのいる世界、すなわち、今日の世界と非常に似た世界のことを物語っています。しかし、その世界、つまり「当時の世界」は滅びました（Ⅱペテ三・六）。サタンが罪を犯した結果激変が起こつたと考えるべきなのに、もし、アダムが創造される前に激変で世界が滅ぼされたと仮定するならば、その世界は、サタンが罪を犯す前に存在していたことに

なるのです。すなわち、サタンが罪を犯し、その結果アダムが罪を犯したはずなのに、その時点より何十億年も前に苦痛や死が存在していたというのです。

しかし、聖書はアダムが罪を犯した時にはじめて世界に死が来たと言っています（ロマ五・一二、一コリ一五・二二）。この事実は、アダムのはるか以前に死が行き渡っていたとする間隙説の仮定事項に完全に矛盾するのです。さらに、サタンの反逆以前の原初に死が行き渡っていたとするなら、そのような状態の責任は、神ご自身にあるのです。しかし、秩序と愛の神が、でたらめと残酷さに立脚する万物の体系を直接創造され、用いられたという考えこそ、実に冒瀆的に思われます。しかし、間隙説はこのような考えを暗に示しているのです。

もし、健全な聖書釈義がこの考えを受け入れるように要求するなら、前述のまたはそれ以外の科学的、神学的問題があったとしても、もちろん、この考えを私たちは受け入れるべきです。しかし、実際には、一章一節、二節をありのまま読むならばそのような考えは、全く示唆されていないのです。

## 第二節

二節 地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。（協会訳）

二節のことばや句は一つ一つ、一節のように、神が創造された宇宙の健全な理解のためにきわめて重要です。

### 1 「そして、地は……であった」（英欽定訳）

一章は初めの一節を除いて、他の各々の節は、「そして（ヘブル語を waw ワーウ）」という接続詞で始まっています。この構文は明らかに各々の声明は連続していて、前後の節と時間的にもつながっていることを意味しているのです。各々の行為は、それに先立つ節に記されている行為に直接つながっているのです。

この様式は、この章の対になっているすべての節に当てはまるように、最初の二つの節にも（当てはめなければなりません。こうして、最初の二つの節の間にはわずかな年代の間隙もさしはさむ余地がないように思われます。二節に記されている状況は、一節の創造のわざに直接つながっているのです。

たとい、これら二つの節の間に大切な時間の間隙があるとしても、前後関係からしてそこに現代地質学で仮定しているような年代を組み込むことを正当化できるような所はどこにもありません。すでに注意したように、このような細工はとも解決できない科学的、神学的問題を生み出すのです。

また、間隙説では、「waw…であった（ヘブル語 hayetha ハイサー）」と記されていることばを、本当は「beame…となった」と訳されるべきだと提案しています。このように、「……となった」を用いることによつて、完全な原始の創造の状態から二節で推理される混沌とした状態に変えられたことを示唆しているというのです。このような翻訳は文法上可能だとしても、この文脈からは、とてもふさわしい訳とは言えません。

この動詞はヘブル語の動詞のハイサーの決まった用法です。状況の変化を表わすのに通常用いられることば（haphak ハフアーク）ではありません。もし文脈上保証されているなら、ハイサーは状況の変化を紹介するために用いることができますが、ハイサーの用いられている九八パーセントは単に「waw…であった」

を意味しているのです。そういうわけで、聖書の欽定訳もその他の標準訳でも、一章二節は常に「waw (あつた)」と訳され、「became (なつた)」とは訳されていないのです。一章の文脈では「こころを特に「became (なつた)」と訳すべきだと示唆するものは全く何もありません。しかし、たゞ「became (なつた)」と訳されるとしても、必ずしも状況の変化を意味しなかったはずで、この動詞は一章一節の神の創造の命令に依じて創造された地球に想定された性質を単に述べているにすぎないのかも知れないのです。

## 2 「形なく、むなしく」

この句は、ヘブル語で tohu wawohu (トーフ・ワボーフ)、または tohu waw yohu (トーフ・ワウ・ボーフ) です。間隙説は、これらのことは本当は「滅ぼされた、または荒れ果てた」、または何かのよくなことばに訳すべきだと示唆しています。そうなら、地球を襲い、地球を混沌と破滅の状態にした神の激变的審判を物語っているはずで、この主張を正当化するために、再建論者は、完全であられる神は、決して混沌とした状態の地球をお造りになりはしなかつたはずだと主張します。したがって、彼らは、このような状態は、創造の後、長い期間が過ぎて、おそらくサタンの罪とさばきのために来たに違いないと言っています。さらに、彼らは、イザヤ書四五章一八節に、神は「いたずら(ヘブル語トーフ)」に地球を造られたのではなく、「人の住みかとしてお造りになつた」と特に言っておられることを指摘します。

しかし、二節のこのような解説は、こじつけで非常に不自然です。トーフということばにはいろいろな意味があります。このことばは旧約聖書に二十回も出ており、欽定訳聖書でも十回も異なることば (vanity,

confytion, empty place, nothing 等々) で訳されています。特に前後関係に基づいて適切な訳が与えられています。二節の文脈で最もよい訳は、欽定訳聖書を編纂した学者たちが、それを「形なく」と訳していますが、まさにその訳なのです。

同様に、イスラエルの地に対する神のご目的との関連でイザヤ書四五章一八節の前後関係から最も良い訳は、「いたずらに」という訳です。その意味は、「神は地を永遠に形なく、住む人もないようにお造りにはならなかつた。神は地を人の住みかにお造りになつた」と読むことができます。一章の創造の物語は、形の無い地球に形をもたらし、空虚な地表に生ける居住者をもたらし各段階を述べています。最初の創造が完成された体系というより、基本的構成要素の創造であつたという説明と一章二節の記述の間には確かに矛盾はありません。最初の創造は完成という意味ではありませんでしたが、神の六日での創造の第一段階としては完全でした。

同様に、ボーフということばは荒廃を暗示しているのではなく、ただ単に「空虚」を意味します。最初に創造された時、地球は居住者がなく、からっぽでした。それゆえ本質的意味は「初めに、神は天と地(または空間と物質)を創造された。また、こうして造られた物質は、最初は形がなく、居住者もいなかった」というのです。

すでに検討したように、創造された宇宙は時間、空間、物質の三つで一つの宇宙でした。最初、星々も植物もなく、時間、空間、物質から成る連続体である宇宙の基本的物質の構成要素だけでした。地球として形を整えるはずの構成要素は、初めはただの元素で、まだ整った形を持っていませんでしたが、それにもかかわらず、基本的物質、すなわち地のちりである諸元素を包含していました。

## 3 「やみが淵のおもてにあり」

光であられる神は、暗闇にとざされた世界を創造出来なかったはずだという考えは間違っています。神ご自身も「わたしは光をつくり、また暗きを創造し」とイザヤ書四五章七節で言っています。物理的宇宙は創造されましたが、形もなくエネルギーも注がれていませんでした。光はエネルギーの一つの形です。物理的に光がないことは闇を意味します。どちらの場合も悪を意味するのではなく、まだ完成されていないことを意味しているだけです。

さらに創造の最初の段階に関する情報は「淵のおもて」という節を通して与えられます。

おもてということばは、ヘブル語で *panim* (パニム) で、元来「存在」(例えば、*in the face of danger*、危険に直面して)に関連して用いられています。事実、しばしば「存在」と訳されています。これが、二節の意味で、おそらく「表面」ではなく、「存在」を意味していることでしょう。すなわち、淵があった所には暗闇もあったのです。

聖書で、後に出てくる「深淵」(*tehom* テホーム)ということばは海の水を指しています。しかし、最初、地は形がありませんでした。同様に海の水にもこの状態を当てはめなくてはなりません。ここに提示されている記述は、暗黒の空間全体に広がった水のような液体の中に保たれているすべての基本的な物質の諸元素の一つです。同じような記述がペテロの手紙第二の三章五節に示唆されていて、「地は……水から出て、水によって成った」とあります。

初期の地球は形がなく、水のような液体になっていたことについて、箴言八章二四、二七節は重要な解説をしています。すなわち「深淵もまだなく、水のみなざる源もなかったとき、わたしはすでに生まれていた。……深淵の面に円を描かれたとき」とあります。箴言八章のこの部分は創造の初めの三日間の各々の日における神の第二位格の驚くべき働きのとめです。

地や深淵が存在する前に存在していたのは第二位格でした(箴八・二三、二四)。また、深淵の面に円を描かれたのは第二位格でした(箴八・二七)。円ということばはヘブル語で *chug* (フッグ) で、このことばはイザヤ書四〇章二二節(主は地をおおう天蓋〈地の円〉の上に住まわれる)とヨブ記二二章一四節(神は天の回り―円―を歩き回る)にも出てきます。こうして、フッグという言葉は地球の球形に言及した非常に興味深いことばです。特に海の形、海の表面が球形であることはどこでも高さの測定の基準(すなわち、海拔何メートル)になるのです。

この円が、深淵の面に描かれなければならなかったという事実は深淵の面はもともと球形をしてはいなかったことを示しており、深淵は一章二節にあるように、形がなかったのです。物質の諸元素や水の分子は存在していましたが、まだ活動していませんでした。このような粒子を凝集して、明確な形にする重力はまだ働いていませんでした。電磁力も働かず、すべては暗黒の中にありました。物質界はありましたが、暗く、形も動きも光もない状態でした。

## 4 「水のおもて」

「水のおもて」という用語は、「淵のおもて」と同意語です。また、「おもて」という語は「存在」を意味します。そして、この考えは形のない水です。ちょうど、形のない地球のように本質的には「凝集体」というより「存在」でした。

すばらしい宇宙が全能の創造者によって存在するように呼び出されましたが、それはまだエネルギーを吹き込まれておらず、運動も始まっていませんでした。さらに、神の霊のエネルギーを与える行為と、神のことに活力を与える力を待たなければなりませんでした。

##### 5 「神の霊が動いていた」(英欽定訳)

万神の名エローヒムは、神は一つであり、また複数でもあることを示唆していると前に述べました。そして、神によって創造された複合体である(三つにして一つの)宇宙は、おそらく、神の三つにして一つであるご性質を反映しているのでしょう。この時点で、神の特別な位格である聖霊が行動を起こしたのがわかります。

「霊」ということばはヘブル語でルアハです。ルアハは「風」または「息」を意味することばです。前後関係によって、各々の文章の正しい意味は何かが決定されます。二節で、創造的行為には風ではなく神ご自身の人格が必要であることは確かです。宇宙はどこでも活性化を必要としていたので、遍在してエネルギーを与える神の位格が、創造のわざのこの時点で、働かれたと正しく述べられています。

聖霊のこの活動は、水の存在のもとに「動いている」活動と呼ばれています。ヘブル語の rachaph(ラハフ)が「動く」とされているのは旧約聖書ではここを含めて三回だけです。他の二回はそれぞれ「震える」(エレ二三・九)と、また「舞いかける」(申三二・一)と訳されています。ある注解者は、その語を特に、めんどりがひなを抱くことに関連させて用いています。いずれにしても、この考えは主として急速な前後運動を意味しています。

現代の科学用語で最もよい訳は、おそらく「振動して」でしょう。もし、宇宙が活性化されるなら、「エネルギーを与える存在がなければなりません。もし、宇宙が活動を始めるなら、原動者(Prime Mover)がなければなりません。

宇宙でエネルギー伝達が光波、熱波、音波など波の形を取るのには大切です。物質自体の構造にある核力を除いて、実際に物質に作用している基本的力は二つだけで、重力と電磁スペクトルの力です。すべては活動の「場」と関連し、波動によって伝達されます。

波は典型的なすばやい前後への運動で、通常、ある種の波発生機の振動によって生じます。エネルギーはそれ自体を造り出せません。宇宙への最初のエネルギーの伝達は、神の霊自体の「振動」運動として記述されているのは最も適切です。

神の遍在の霊から流出するエネルギーが外に向かって流れ、宇宙に浸透し始めるにつれて、重力は活性化され、水や地の粒子は一緒に集まって空間を動いているに大きな球体を形成しました。他のこのような粒子は、間もなく集まって、太陽、月、星々を宇宙いたるところに形成したことでしょう。こうして深淵のおもてに、今や、「境界」がありました。そして、形のない地球が完全な美しい球形になったのです。光と熱とその他の生命を与えるいろいろなエネルギーが準備されました。

聖書に述べられている聖霊の他の「活動」があります。「なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです」（Ⅱペテ一・二二）。

ここで用いられている「動かされる (moved)」はギリシア語のフェローで、フェローは七十人訳聖書で創世記一章二節の「動いた (moved)」の訳として実際に用いられています。聖霊が原始宇宙を活性化して、神の創造に形態と生命をもたらしたように、後に神は預言者たちに力を注ぎ、神のことばを完成し、このみことばを活性化して、新しい創造に美と霊的生命をもたらしたのです。